

論文の概要及び審査結果の要旨

氏名	南部 登志江
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	甲第11号
学位授与の要件	大阪総合保育大学学位規程第13条
学位授与の日付	平成30年3月18日
学位論文題目	幼児と高齢者の世代間交流に関する発達心理学的考察
論文審査委員	主査 山崎高哉（大阪総合保育大学教授・博士(教育学)） 副査 小椋たみ子（大阪総合保育大学教授・博士(文学)） 副査 西本望（武庫川女子大学教授・博士(教育学)）

〔1〕 論文の概要

本論文は、今日その重要性が指摘されている世代間交流、なかでも幼児と高齢者の世代間交流を研究する発達心理学的意義を明らかにするとともに、幼児と高齢者の世代間交流の実際を調査・観察し、その効果並びに交流を継続するための課題を検討した、実践に寄与するところの大きい論文である。

本論文は、

序章

第1章 少子高齢化の現状と世代間交流の必要性

第2章 世代間交流に関する歴史と近年の動向

第3章 各世代別に見た世代間交流、なかでも幼児と高齢者の世代間交流

第4章 幼児と高齢者の世代間交流の実態に関する研究

第5章 世代間交流を行っている保育所職員、高齢者ケア施設職員へのインタビュー調査

第6章 幼児と高齢者の世代間交流場面の観察

第7章 子どもと高齢者の世代間交流の望ましいあり方

終章 今後の課題

から構成されている。以下に各章の概要について述べる。

「序章」で、論者は、世代間交流を「子ども、青年、壮年および高齢者という世代の異なる人々が相互に交流し、互いに自分たちの持っている能力や知識・技能を出し合い、自分自身を向上させるとともに、互いの生活文化や価値観への理解を深め、かつ、自分の周りの人々や社会に役立つような健全な地域づくりを実践する活動である」と定義し、世代間交流、なかでも幼児と高齢者の世代間交流を研究する意義として次の四つを挙げている。

すなわち、第一は、人間における世代の重なりには文化を育み、継承し発展させるという特別な意味があること。第二は、世代間交流を通じて相手を理解しようとするのが、自分自身の成長・発達を促し、また互いに影響し合い、さらなる発達へとつながっていくこと。第三は、幼児期に高齢者を初めとする多世代とのかかわりによって、言語や運動能力、情緒等の発達が促進され、幼児期の発達課題が達成されること。第四は、高齢者にとっても「英知の感覚」を統合していくという発達課題の達成につながる。これらによって、幼児と高齢者の世代間交流が一つの重要な交流と捉えることができるであろう。

第1章「少子高齢化の現状と世代間交流の必要性」では、我が国の少子高齢化の現状が紹介されるとともに、都市化や核家族化の進行により、幼児と高齢者が触れ合う機会が減り、世代間交流の必要性が高まっていることが確認されている。さらに世代間交流を困難にしている要因の一つとして高齢者の認知症症状が取り上げられ、認知症に対する理解や支援の必要性が指摘された。

第2章「世代間交流に関する歴史と近年の動向」で、論者は、世代間交流を定義した上で、文献研究を通して、我が国における世代間交流の歩みについて、1960～70年代と、「世代間交流」という言葉が使用されるようになった1980年代～現代までに分けて辿るとともに、世代間交流の近年の動向について、保育所や幼稚園、各学校段階、さらには児童館や地域子ども教室等における多様化された取組を紹介している。

第3章「各世代別に見た世代間交流、なかでも幼児と高齢者の世代間交流」において、論者は、各世代の子ども(乳幼児期から大学生まで)と高齢者との世代間交流の現状と課題について検討するとともに、世代間交流の中でも幼児と高齢者の世代間交流に着目することの意義と必要性を明確にしている。

幼児が高齢者と触れ合う交流体験によって、「高齢者を大切にできるようになる」「人のことを思いやることができるようになる」「家族を大切にできるようになる」「性格がやさしくなる」などの効果があり、また幼児期に高齢者と親密な交流をもった経験がある子どもは児童期、思春期においても、高齢者に対してポジティブなイメージをもっている。

しかし、実際に行われている活動では、交流回数は年に数回であったり、内容も行事中心であったりすることが多い。その理由としては、交流の仲介を勤める職員の負担の大きさや、施設を初めとする周りの職員の理解不足、さらには効果的な交流プログラムや進め方などの知識・経験不足などが考えられる。

第4章「幼児と高齢者の世代間交流の実態に関する研究」では、論者は、保育所(園)・幼稚園の職員を対象とした世代間交流のアンケート調査を実施し、その結果について発達心理学の観点から考察して、子どもと高齢者の世代間交流は、それぞれの発達課題の達成や自我の発達において重要な役割を担っていることを明らかにしている。

第5章「世代間交流を行っている保育所職員、高齢者ケア施設職員へのインタビュー調査」では、日常的に世代間交流を行っている保育所職員、高齢者ケア施設職員等へのインタビュー調査が行われ、具体的な交流内容の実際や職員が考えている世代間交流の効果及

び課題、さらに高齢者の認知症症状に対する子どもたちの反応や交流に当たって職員が留意していることなどが明らかにされている。

第6章「幼児と高齢者の世代間交流場面の観察」において、論者は、世代間交流を仲介する保育士や施設職員の進行方法などの観察を通して、より具体的に幼児と高齢者の交流の状況、相互のコミュニケーション、仲介する保育士や施設職員のプログラム構成や進行方法の工夫などを知り、交流の効果や今後の課題を検討している。

交流場面の観察や交流後の幼児、高齢者、職員へのインタビューから明らかになったことは、世代間交流は幼児の感情表現を豊かにし、高齢者に自分たちが元気を与えていたという有能感を感じさせるとともに、自己肯定感を高めていること、高齢者も、難聴や認知機能の低下などがあるため、幼児が行ったプログラム内容はよく覚えていないが、涙が出るほどかわいく感じたり、笑ったり、快いとか、楽しいとか感じたりすることによって自己昂揚感を高め、認知症の進行やBPSD(認知症に伴う行動・心理症状のこと)の予防ともなることである。

第7章「子どもと高齢者の世代間交流の望ましい在り方」で、論者は、世代間交流が幼児にとっても高齢者にとっても、また保育者や施設職員にとっても、人間だけがもっている未来を意識し未来に向かって生きようとする意志を発揮させ、互いの発達課題の達成や自我の発達に影響を与えることを述べるとともに、その世代間交流活動がより活発となり、発展していくための方策として、交流を支えるコーディネーターの育成、自治体や地域を巻き込んだ世代間交流の必要性、学問としての分野の構築などを提案している。

終章「今後の課題」において、論者は、世代間交流を進めていく上で保育士と高齢者ケア施設職員への支援の必要性を再度強調するとともに、幼児と高齢者ケア施設を利用している高齢者との交流だけでなく、もっと年代を広げて小・中学生と高齢者の交流について考察すること、地域で生活している健康な高齢者と子どもの世代間交流についても調査することなどが今後の課題として残されているとしている。

[2] 審査結果の要旨

本学大学院児童保育研究科学位（課程博士）審査規則は第10条に「博士学位申請論文の審査基準は、以下の基準に基づいて厳正に行うものとする」と規定している。その審査基準は「(1) 当該博士学位申請論文が、当該申請者の研究業績をふまえ、その集大成と認められる内容であること、(2) 当該博士学位申請論文の属する研究領域において、独創性が認められること、(3) 当該博士学位申請論文の属する研究領域において、その水準の引上げに資するものであると認められること、(4) 当該博士学位申請論文に、他の研究領域を含む学際性が認められること、(5) 本学大学院が授与する博士の学位にふさわしいと認められるものであること」である。

もとより、博士学位申請論文が五つすべての審査基準を満たしていなければならないわ

けではないが、本論文がこれらの審査基準にどの程度適合しているか、順次検討を加えて行きたい。

まず、(1) 「当該博士学位申請論文が、当該申請者の研究業績をふまえ、その集大成と認められる内容であること」について。

本論文は、第3章「各世代別に見た世代間交流、なかでも幼児と高齢者の世代間交流」、第4章「幼児と高齢者の世代間交流の実態に関する研究」及び第5章「世代間交流を行っている保育所職員、高齢者ケア施設職員へのインタビュー調査」は以下の学術雑誌や本学の紀要に掲載された論文及び学会における口頭発表やポスター発表において公表されたものであり、本論文執筆に際して必要な加除修正が加えられたものである。

<学術雑誌に掲載された論文>

- 1 自我発達の観点からみた子どもと高齢者の世代間交流の意義について、単著、査読有、大阪総合保育大学紀要第8号、2013
- 2 幼児と高齢者の世代間交流の現状と課題、単著、査読有、発達人間学研究第15巻 第1号 2014
- 3 高齢者と子どもの世代間交流の意義－高齢者ケア施設職員と保育所職員の意識の比較－、単著、査読有、日本看護福祉学会学会誌 Vol.22 No.2 2016

<専門学会で行った口頭発表>

- 1 高齢者と幼児の世代間交流の現状と課題－大阪府A市における幼稚園・保育所へのアンケート調査から－ 単著、査読有、日本看護福祉学会 2015

<専門学会で行ったポスター発表>

- 1 **Facts and Significance of Intergenerational Exchange Between Older People With Dementia, 31st International Conference of Alzheimer's Disease International** 単著、査読有、2016
- 2 **Intergenerational Exchange Between Nursery school children and Nursing home residents. 32st International Conference of Alzheimer's Disease International** 単著、査読有、2017
- 3 高齢者と幼児の世代間交流の効果や課題に関する文献検討 共著、査読有、日本老年看護学会 2017

もつとも、序章、第1章、第2章、第6章及び第7章、そして終章はすべて書下ろしであり、本論文は論者の従来からの研究業績を踏まえた集大成とは必ずしも言い難い。ただし、高齢者と幼児の世代間交流に関して国際学会においてポスター発表をしていることは高く評価できる。

次に、(2)の「当該博士学位申請論文の属する研究領域において、独創性が認められること」について。

本論文には独創性と認められるところが3点挙げられる。

まず一点目は、本論文が世代間交流、なかでも幼児と高齢者の世代間交流を研究する意

義として次の四つを挙げ、幼児と高齢者の世代間交流の発達心理学的意義を明らかにした
ことである。

論者によれば、その意義の第一は、人間における世代の重なりには文化を育み、継承し
発展させるという特別な意味があるということであり、第二は、世代間交流を通じて相手
を理解しようとするのが、自分自身の成長・発達を促し、また互いに影響し合い、さら
なる発達へとつながっていくことである。第三の意義は、幼児期に高齢者を初めとする多
世代とのかかわりによって、言語や運動能力、情緒等の発達が促進され、幼児期の発達課
題が達成されることであり、第四の意義は、高齢者も「英知の感覚」の統合という発達課
題の達成に向けて、文化や英知を次の世代へ伝承していくことが求められるが、幼児との
世代間交流が、その課題達成につながるということである。

総じて、少子高齢化時代の我が国において、幼児と高齢者の世代間交流は、幼児にとっ
ては、その育ちを支援し高齢者へのポジティブな認識をもたらすとともに、将来の社会的
活動への参加を促す原動力になる一方、高齢者にとっても今までの経験や知識が生かされ
ることにより、自尊感情や有用感も高まるという意義があると言えよう。

次に、本論文の独創性と認められる点は、幼児と高齢者の世代間交流の実態を調査・観
察し、交流の効果並びに交流を継続するための課題を明らかにしたことである。すなわち、
幼児が高齢者と触れ合う交流体験によって、高齢者を大切にし、人や家族のことを思いや
り、性格がやさしくなるなどの効果があり、また幼児期に高齢者と親密な交流をもった経
験がある子どもほど児童期、思春期においても、高齢者に対してポジティブなイメージを
もっていることを明らかにするとともに、実際の交流の回数は年に数回であったり、幼児
が高齢者施設を訪問したりする形式が多く、内容も行事や発表・ゲームなどが中心である
などの問題点を指摘している。論者はまた、交流を仲介する保育所職員や高齢者ケア施設
職員の負担の大きさや認知症高齢者に対する保護者の不安、交流による感染症発症の機会
の増加などの課題を確認し、そのため幼児と高齢者の世代間交流では、事前の打ち合わせ
を十分に行い参加者の特性を押さえておくこと、風邪などの感染症が流行している季節に
は交流を控えることやうがい、手洗いなどの感染症対策を行うことを提案している。

さらに、論者が、認知症高齢者を含む、高齢者と幼児との交流場面を観察するとともに、
交流後に幼児や高齢者、職員にインタビューし、なかでも認知症高齢者が、自分が話した
り行動したりしたことは忘れてしまっているが、相手の対応で抱いた感情だけはしっかり
覚えており、幼児の自然な受け止め方や優しい握手は心地よさやうれしい気持ちを残
し、認知症の進行や認知症に伴う行動・心理症状の予防ともなることを明らかにしている
のは、注目に値する。

本論文の独創性と認められる今一つは、幼児と高齢者の世代間交流の望ましいあり方と
して、交流を支えるコーディネーターの育成、自治体や地域を巻き込んだ世代間交流の必
要性、学問としての分野の構築について具体的に提言していることである。

- ① 幼児と高齢者を仲介するコーディネーターの育成—現在、行われている世代間交流は、ほとんどを保育士や施設職員が担い、その方法も自分たちの経験を活かして行っている状態であるが、交流進行のスキルを高め、参加者やコミュニティの利点をより重視したプログラムを開発できるコーディネーターの育成が急務である。
- ② 自治体や地域を巻き込んだ世代間交流—世代間交流を行う目的は個人や団体で異なるため、その目的を達成できるような方法やプログラムの工夫が必要であるが、地域住民の特性を知っている自治体や地域を巻き込み、安全な場所や環境を確保し、交流のための予算もつけ、参加者による評価も行う。
- ③ 学問としての分野の構築—欧米では世代間交流に関する研究が盛んで、教育の場面でも取り入れられているが、我が国においても大学に世代間交流に関する講座や研究センターを設置し、世代間交流の様々な課題に応えられる理論や実証研究などを発展させる。

今後、世代間交流を行う地域や大学・研究機関及び保育・教育現場でも大いに参照されることになるであろう提言であると言える。

(3) 「当該博士学位申請論文の属する研究領域において、その水準の引上げに資するものであると認められること」について。

本論文が幼児と高齢者との交流場面での観察において当該研究領域の研究水準の引き上げに貢献している点について述べることにする。

論者は、幼児と高齢者との交流において、世代間交流が幼児及び高齢者、さらには施設職員に及ぼした影響について克明に記述している。

まず世代間交流が幼児に及ぼした影響について、論者は、幼児が高齢者の中にも様々な人がいることを理解し、高齢者への自然な対応をしたり、抱っこしてもらった高齢者のことは次に会ったときでも「やさしいおばあちゃん」とよく覚えていたり、高齢者にほめられ、見守られることによって、集中して活動し、自主性を高めたり、年長組が交流している姿を見て「次はぼく達の番や」と思ったり、困っている人を見たら助けないといけないと思ったり、高齢者のみならず他者に対する幼児の心の成長を認めている。

次に、世代間交流が高齢者に与えた影響について、論者は、幼児が交流会場に入ってくるだけで、会場の雰囲気が変わり、普段はあまり笑うなどの表情がない高齢者でも笑顔になったり、幼児が作った腕輪などのプレゼントにぼろぼろ泣いて「いじらしい、いじらしい」と褒めたりするなど「子どもの力による変化」「子どもを見る視線や表情の変化」を認めている。さらに、論者は、例えば、製作などの場面で母親なら自分の子どもにうまく作らせようとするのが多いのに対し、高齢者は一つ一つ待ちながら、一緒に作ったり、手伝ったりするなど、高齢者の「経験知」を活かした適切な支援を行っている場面を報告している。そのような高齢者の経験や知識を活かした幼児との「相互作用の積み重ね」が交流の効果を高めているのである。

さらに、世代間交流が保育所職員や高齢者ケア施設の職員に与える影響として、論者

は、保育所職員や高齢者ケア施設の職員が仲介の負担の大きさにもかかわらず、「これから地域で育っていく子どもたちの手伝いができればいい」、子どもは自分たちの立居振舞を見て、「大きくなったときに優しい気持ちを育ててくれるのではないか」など、「子どもの将来の成長への願い」や「自分たちも今の子どもや家族状況に合わせ、学習していく」という「地域貢献に対する役割認識」を持っていることを明らかにしている。

(4) 「当該博士学位申請論文に、他の研究領域を含む学際性が認められること」について。

論者は、少子高齢化並びに核家族化の現状に関する各種行政白書を丹念にレビューしているのみならず、世代間交流に関する先行研究にも数多く当たり、特に幼児と高齢者の世代間交流の発達心理学的意義について論じている。また、論者は、我が国の高齢化と、幼児・児童との世代間交流を困難にしている認知症との関連にも論及し、認知症の中核症状とそれに伴う BSPD の症状、それに認知症高齢者の増加に対する厚生労働省の施策について紹介している。

本論文は、世代間交流と発達心理学の研究を中心に、医療分野や保育・教育分野にまたがる理論的かつ実践的な研究であり、そこに、学際性を認めることができる。

(5) 「本学大学院が授与する博士の学位にふさわしいと認められるものであること」について。

論者は、本論文において、「論文の概要」でも述べたように、少子高齢化や核家族化の進行により、その必要性が高まっている世代間交流、なかでも幼児と高齢者の世代間交流の発達心理学的意義について考察を加えている。すなわち、論者は、幼児と高齢者の世代間交流に関する各種実態調査を通して、幼児が高齢者との交流体験によって、幼児期の発達課題を達成するとともに、高齢者を初め、他人や家族を思いやり、大切にするなど、顕著な効果を挙げ、また高齢者と親密な交流をもった幼児は児童期、思春期においても、高齢者にポジティブなイメージを持っていることを明らかにしている。

本論文は、このように、幼児と高齢者の世代間交流の発達心理学的意義について考察するとともに、幼児と高齢者の世代間交流の望ましいあり方を具体的に提言しており、本学の授与する博士(教育学)の学位にふさわしいと認めることができる。

本論文は、以上のように、高く評価すべき独創性を豊かに備えているが、論者自身が今後の課題としたもののほかに、博士学位請求論文公開審査会において審査委員よりいくつ問題点が指摘されたので、列挙しておこう。

第一に、検討された先行研究に古い文献が多く、最新の研究動向が明らかになっていないのではないかと指摘された。

第二に、第5章の保育所職員(子育て支援センターの保育者を含む)、高齢者ケア施設職員等へのインタビュー調査において、インタビューした対象数が少なく、また、対象施設の種類も様々であるため、もっと対象数を増やした方がよかつたのではないかと指摘があった。

第三に、序章から第 3 章までの理論的考察と第 4 章以下の調査や観察における考察との間に有機的なつながりが欠けているのではないかという指摘があった。

第四に、アンケート調査において、「個人情報の取り扱いには十分注意し、得られた情報は本研究および学会発表以外には使用せず、研究終了後には破棄いたします」とあるが、研究不正の続発により、調査データは 10 年間保管することになっていると指摘された。それを受けて、審査委員の一人から本学の研究倫理規程を早速改訂するとの発言があった。

以上、論文審査委員により指摘された本論文の主たる問題点を列挙した。たしかに、本論文にこれらの問題点が含まれているのは明らかである。しかし、これらは、今後の研究の進展によって早晩解決されるであろうし、課程博士論文としての価値を大きく損なうものではない。

よって、本論文は、博士（教育学）の学位授与にふさわしいものと論文審査委員全員一致で判断した。